

2013 3/12

No.1942

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



豆腐料理の里として知られる伊勢原市大山地域で2、3の両日「第23回大山とうふまつり」が行われ、メイン会場の「とうふ広場」では直径約4mの大鍋「仙人鍋」で作られた湯豆腐が来場者に振る舞われた。



contents

視点・点描	3
「3万人割れ」安どは禁物	
政治	4
日本衰退論への対策を アベノミクスは日本を救えるか	
国際	6
米で広がる屋台トラック 個性派ぞろい、自治体も支援	
It's 小タイム	8
現場主義で復興加速	
政治反射鏡	9
維新に野党の覚悟ありや 橋下氏VS国会議員団	
くらし2013	10
性犯罪被害救済に課題	
企業最前線	12
3月期、アベノミクス効果	
広告珍談	14
～うまい物がたり⑩ コンクール入賞	
海外都市事情	15

事務局だより

◇横浜定例講演会

2013年3月13日（水）

富士ゼロックス神奈川株式会社と共催

ホテル、ニューグランド「レインボーボールルーム」

▽特別講演 15時30分～16時30分。講師は元ヤクルトスワローズ監督の古田 敦也氏、演題は「優柔決断のすすめ」

▽基調講演 16時40分～17時40分。講師は第29代海上幕僚長の赤星 慶治氏、演題は「日本における周辺情勢」
▽懇親会「神奈川情報交流会」17時50分～19時30分、「ペリー来航の間」

◇横浜定例講演会

2013年4月24日（水）

13時30分～15時

新横浜プリンスホテル3F「ファンタジア」

講師は共同通信社経済部長

永井 利治氏

演題は「参院選を見据えた安倍政権の経済・財政運営の課題」（仮題）」

視点 点描



「3万人割れ」安どは禁物

「す。」と直球のメッセージが印刷され、全国一斉の電話相談（0570）064556、県内から電話した場合は神奈川県精神保健福祉センターにつながるのを受け付けたり、ゲートキーパー養成のための動画を内閣府のホームページで公開したりする。

自殺に追い込まれることのない社会」にもほど遠い。「3万人割れ」に気を緩めることなく、引き続き自殺対策に力を注ぐことが肝心である。

遺族ケアに関しては、この分野で先駆的な役割を果たしてきたNPO法人全国自死遺族総合支援センターが新たに、親や身近な人を亡くした子どものケアにも乗り出した。若年層の自殺が増加傾向にあり、それに伴って遺児となる子どもも低年齢化しているとの危機感が背景だ。

政府の定める自殺対策強化月間

が3月であることを、果たしてどのくらいの読者が存じだろうか。例年、月別の自殺が1年で最も多い月であることから、2010年から同月を「月間」と位置付け、自殺防止のキャンペーンを全国的に展開してきた。

昨年は人気アイドルグループAKB48をイメージキャラクターに起用。標語も、思い悩む人が発す

るサインに気付いて相談機関など

につなげるゲートキーパー（GK）にちなみ、「あなたもGKB47宣言！」といったん決めながら、「人の死をばかにしている」といった批判を浴びて結局は撤回する騒動があったので、ご記憶の方もいるはずである。

今年はその反省からかアイドルは起用しない。広報用ポスターも「3月は『自殺対策強化月間』で

自殺対策をめぐっては、昨年2012年の国内の自殺者数が2万7766人と1997年以来15年ぶりに3万人を下回った。県内の自殺者数も1624人と前年より228人減った。自殺者数は98年に初めて3万人を超えて高止まり状態が続いていたから、減少に転じたこと自体は歓迎すべき傾向である。しかし、なお2万8千人近い人が尊い命を自ら絶っている事実は重く、昨年8月改定の自殺総合対策大綱に副題として盛り込まれ、私たちが実現を目指す「誰も

自殺に追い込まれることのない社会」にもほど遠い。「3万人割れ」に気を緩めることなく、引き続き自殺対策に力を注ぐことが肝心である。

遺族ケアに関しては、この分野で先駆的な役割を果たしてきたNPO法人全国自死遺族総合支援センターが新たに、親や身近な人を亡くした子どものケアにも乗り出した。若年層の自殺が増加傾向にあり、それに伴って遺児となる子どもも低年齢化しているとの危機感が背景だ。

聖路加国際病院を会場に1月から、月1回のペースで子どもたちが集い、大切な人と死別した気持ちを分かち合う。急務の遺児ケアの充実に向け、着実な一歩が踏み出されたことは心強い。

（神奈川県新聞社

統合編集局次長 宮本 敏也）

コンクール入賞

森永製菓はキャラメルの空き箱でつくった、作品を公募した。第1回は1932（昭和7）年10月、応募者はほとんど小学生。年々応募数が増えて、4年目には2000校余りの小学校が参加。作品総数は、56万点余りにもなった。

こんな好結果は予想出来なかった。普通人の域を脱し、本職の工芸作家にもなかなか出来ぬ立派なものを作っている」と和田三造は書いた。

「この芸術が

賞金は特選30円10名、1等20円20名、2等10円50名、3等5円200名。当時、小学校教員の初任給（基本給）は45円から55円であった。

ここまで発達し、専門家の注意をひくことは誰も予期しなかった。確かに

審査員は、東京美術学校校長や帝国美術院院長を歴任した正木直彦。洋画家・和田三造や和田英作など。人物像や五重塔など、大きく手のこんだ作品に「学校教育と

美術の領域に進んだものと考え」と和田英作は評価した。まさに「キャラメル芸術」である。

併行する児童の美育教練として、国民の美的陶冶に大きな価値をもつであらう」と正木はいう。「小学生の作品の進歩は目覚ましい。

ますます増えつづける応募作に森永は、社内に「学芸部」を設けて対応した。しかし1937（昭和12）年、日中戦争勃発で中止。

展覧会、9日間で80万人の観衆でにぎわった。広告界では古くから、デザインやコピーのコンクールが盛んに行われた。媒体が主催したり、企業が公募したりと。その最初は連載

兵隊である。賞金は知らない。（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）（図）「日本一のグリコ」1934（昭和9）年8月・大阪毎日新聞掲載



翌年、ドイツ・イタリアとの3国親善図画コンクールを開いた。審査員に洋画家の石井柏亭、日本画の結城素明が加わった。応募点数400万3000点、3回の審査を繰り返して7万5000点にし

1928号に紹介した、三越のポスターであった。ユニークなのは34（昭和9）年、味の素が広告標語（キャッチフレーズ）を募集した。応募数約4万3000通。1等の該当作はなく、2等以下の入賞作を新聞広告で発表した。

「味の素アリ、まづい物ナシ」
「味よく、食よく、よく太る」
「味覚日本晴れ」「舌へ忠、腹へ孝」。この4作が2等、賞金は50円

「味の日の丸」。「美味満員味覚売切」など6作が3等、賞金は20円であった。

上の広告は、おなじ年、大阪毎日新聞社が公募した「産業美術振興運動入賞広告図案」の受賞作グリコ。イラストは桃太郎と陸軍の